

フェイスブックと「過去の記憶」

フェイスブック投稿から多くの情報を仕入れるだけでなく、毎日レポートなどを発信している。私の数少ない情報交換の場だ。それと「過去の記憶」を呼び起こしてくれる。数年前の同じ日の投稿が再現され、過去を振り返ることができる。昨日も4年前の2017年6月28日のレポートに「再会」できた。押富俊恵さん「地域で暮らして想うこと～医療職として、当事者として」と題した名古屋市立大での講演である。残念で悲しいが、押富さんは今年4月23日に亡くなった。レポートの一部を修正して紹介したい。

ピース・トレランスは2015年12月14日に設立され、愛知県尾張旭市を拠点に活動するNPO。活動分野は「保健、医療又は福祉の増進を図る活動」、活動内容は「市民の方々に障害の重い方々の日常生活を知っていただき、ハンディを持った方々にとって住みやすい街とは何かを考えていただきながら『ともに生きる』『全ての人が幸せに生活できる』地域を創りだすための啓発活動」。



じつは押富さんとは昨年の今ごろ、「バクバクの会」懇親会でお会いした。その後もフェイスブック「仲間」として交流している。私の寒いダジャレに、いつも厳しい指摘をしてくれる。評判の「押富節」を楽しみにしていた。まさに押富さんの人生と、人柄を感じさせる講演だった。くるま椅子の特注の台の上でパソコンを自在に操作する押富さん。とりわけ印象に残ったことを紹介する。

押富さんは24歳のとき「重症筋無力症」になった。それまでは健康優良児であり、「健常者歴24年、障害者歴12年」に。病気になる前には、リハビリテーション病院に勤務する作業療法士。「私は健常者から障害者になったと同時に、医療職という支援する側から、障害当事者という支援される側になりました」

話は介護を受ける側になって感じるストレスに。「いちいち言葉にしなくては伝わらないのがなんとも私の心をイラつかせ」と(講演でも紹介されたが、押富さんのフェイスブックに毎週のように具体例が)。今の私にとって人工呼吸器は「活動の幅を広げるもの」。日常生活で欠かせない医療的ケアは、「医療行為」というよりは「生活の一部」。

話は変わって、全国の「佐藤さん、鈴木さん、高橋さん、田中さん、伊藤さん」と、全国の障害者手帳所持者はほぼ同じ数。でも障害者の知り合いは、かなり少ないのでは。その原因として、子どもの時期に「障害のある・なしで分けられる」ことに問題の一端があるのでは。

わかりやすく示唆に富む講演であった。もっとお聴きしたかった。

(2021年6月29日)